紹介

アメリカ初期資本主義にかんする最近の諸文献について

宇治田富造

一

アメリカの資本主義を、その歴史的発展の順序で研究するばあいに、研究者がまず最初に解明しなければならない中心課題は、アメリカ革命すなわち独立戦争の問題である。ウィリアム・フォスター（William Z. Foster）は、イギリスの一三植民地における革命をピークとするところの、一八世紀の最後の四分の一期とそれにつづく六〇年間にわたって西半球全土をそのなかにまきこんだ一連の革命の性格を、『民族植民地解放革命』（national colonial liberation revolution）と規定した。

そしてかれは、「いくつかのアメリカ革命は、ひとつの一般的運動の多くの分節にすぎなかった。この偉大な運動の中心点は、封建制度にたいする革命的攻撃であった。それは広汎な全アメリカ・ブルジョア革命、すなわちキャピタリスト革命であった。」しかも同時に「革命の中心的要求は、どこにおいても、民族的独立であった」[1]とのべている。

このように、いくつかのアメリカ革命はひとつの共通した性格をもってはいたが、それらは、おのおのの植民地の特殊な矛盾のために、それぞれことなったニュアンスをおびていた。たとえば、封建スペイン、ポルトガル、フランスによってその当時支配されていたラテン・アメリカの植民地では、革命は封建主義の特徴的な様相によって制約された。これに反して、イギリスの一三植民地では、革命はもっとも鮮明にブルジョア的性格をおびた。

イギリスの一三植民地においては、植民地人は革命時には、封建的諸関係を一掃して新しい民主主義的秩序を樹立するために、そして同時に、イギリスの支配階級の植民地支配をうちやぶり、民族的独立をかちとるために、偉大なエネルギーとおどろくべき創意とまれにみる愛国心とを発揮した。だからレーニンは、この革命を、「かつてまれにみる、偉大な、眞に解放的な、眞に革命的な、諸戦争のひとつ」だとよんだ。この革命は世界資本主義の歴史的発展における重大な出来事であると同時に、アメリカ合衆国の資本主義的秩序の発展のための基礎をつ

くったのである。

ところで、この革命の勝利によってその急速な発展の基礎をあたえられたアメリカ資本主義は、そのご二世紀の歴史の経過とともに、今日では、国内の大多数の人々を搾取し、また多くの独立国や後進国を従属国、植民地にして、これら諸国の民族を政治的にも、軍事的にも、経済的にも支配する帝国主義国家にかわった。そしてかつてはアメリカ自由のための斗いにおいて進歩的な役割をはたしたブルジョアジーは、今日では反動的な帝国主義ブルジョアジーにかわり、あらゆる民主主義的自由を抑圧している。しかしそれと同時に、ブルジョアジーは、民主主義的自由のための斗いにおける新しい旗手を、すなわち、プロレタリアートを、国の内外においてつくりだした。こうして、このブルジョアたちの遠い祖先が、かつてイギリスやスペインやフランスの貴族的専制主義に反対して叫んだ声は、今日では山びことなってかれらの自身の耳朶をうつのである。

ヴァージニアの愛国者パトリック・ヘンリー(Patrick Henry)は、革命の前夜一七七五年三月二四日に、ヴァージニア代議員会議の席上で「われわれに自由をあたえよ、さもなくば死をあたえよ」と叫んだ。この燃えあがるようなヴァージニア人は、たんにイギリスの一三植民地人にむかってばかりでなく、ヨーロッパ列強の抑圧下にあった全米州の国々のひとびとにもむかって、民族解放と民主主義のための斗いに立ちあがるように、こう訴えたのである。だが、パトリック・ヘンリーのこの叫び声は、今日では、アメリカ独占資本の支配下にある多くの植民地・従属国のひとたちに訴えたものとして、意義をもつであろう。

われわれ日本の国民が、今日、日本の問題をじぶんたちの手で正しく解決しようとするばあいに、この解決を困難にしている最大の原因は、アメリカ独占資本が日本を政治的にも経済的にも支配しているという事実である。したがって、日本の国民は、この問題の徹底的な解決のために、今日のアメリカの占領者たちの遠い祖先が、二世紀前の過去に、ヨーロッパの貴族的支配者に反対して行動した経験のなかから、なにか貴重な教訓をまなびとることができないであろうか。もっとも、二世紀という歴史の流れは、この運動の歴史的規定性をかえており、この運動を指導し、推進する社会勢力の担当者をひとつの階級から他の階級におきかえてはいるのではあるが。こう考えてくると、アメリカ資本主義の歴史的研究の最初の課題であるアメリカ革命を研究することの意義が、この研究が過去の歴史的事実のなかから社会発展の法則を発見するという経済史学的な側面にあるばかりでなく、この発見された社会発展の法則を、今日日本の国民がじぶんたちの当面している問題をみずから解決するにあたって、利用しうるという実践的な現在的な側面にもあるといわなければならない。

1、William Z. Foster; Outline Political History of the Americans" 1951, pp. 121—22.

II

ところで、アメリカ革命は、イギリス本国と植民地とのあいだの、および植民地内部における諸階級間の、諸矛盾によってひきおこされたものである。そしてこれらの諸矛盾は、一六〇七年にヴァージニアのジェームス・タウンにイギリスの最初の永久的植民地が形成されて以降一七〇年の長いあいだにわたって、植民地の経済的および政治的諸関係の発展のなかに胚胎してきたものである。したがって、われわれは、植民地の経済的および政治的諸関係の発展を正しく分析することによってのみ、これらの諸矛盾のうち、なにが主要な矛盾であり、なにが従属的な矛盾であったかを正しく把握することができ、それゆえにまた、アメリカ革命の本質を正しく把握することができるのである。

イギリスの一三植民地の政治的、経済的諸関係をとりあつかった文献は枚挙につきせぬほど数多くあるが、そのなかでも、従来、権威のある主要な諸文献としてみとめられてきたものには、つぎのようなものがある。

A) Andrews, C. M.; „Colonial Period of American History", 4 vols. 1934—38.

B) Bancroft, G.; „History of the United States" 6 vols., 1885.

C) Channing, E.; „A History of the United States" 6vols. (最初の2巻が植民地時代をふくむ), 1905—25.

D) Doyle, J. A.; „English Colonies in America" 5 vols., 1889—1907.

E) Gipson, L, H.; „British Empire befor the American Revolution" 5 vols., 1936—42.

F) Osgood, H. L.; „American Colonies in the Seventeenth Century" 3 vols., 1904—06.

G) Osgood, H. L.; „American Colonies in the Eighteenth Century" 4 vols., 1924—25.

右に例挙した諸文献はいずれも、数巻におよぶ尨大な労作であり、アメリカ資本主義の発生期の研究のためには貴重な資料である。

なお、右の諸文献のほかにオリヂナルの資料としては、つぎのものがある。

1) „Original Narratives of Early American History" edited by J. F. Jameson, 19 vols., 1906—19.

2) „American History Told by Contemporaries" edited by A. B. Hert, 1899—1923. (1巻および2巻は1492年から1783年までふくむ)

また1巻におさめられた便利な資料集としては、つぎのもの

がある。

3）Commager, H. S.; „Documents of American History" 1934.

4）MacDonald, W.; „Documentary Source Book of American History" 1916.

5）West, W. M.; „A Source Book in American History to 1783" 1913.

ところで、第二次大戦前後からアメリカの一連の進歩的な経済学者および歴史家たちは、右のような基礎的諸文献を批判的に摂取し、史実の科学的な分析にもとずいて、アメリカ資本主義にかんする、相互に関連のある一系列の諸労作をひきつづいて公けにしてきた。もちろん、これらの著者たちの諸労作中には、歴史的著作ばかりでなく、現代のアメリカ独占資本の分析にそそげられた一連の労作がふくまれており、それらのうち若干のものは、すでに邦訳出版されている。たとえば——

Labor Research Association; „Monopoly To-day"（労働研究協會，『現代の獨占資本』. 三一書房. 上井譯.）Labor Research Association; „Trends in American Capitalism"（労仂研究協會，『アメリカ資本主義の趨勢』，有斐閣. 高橋・松田譯）

Victor Perlo; „American Imperialism"（ヴイクター・パウロー『アメリカ帝国主義』三一書房，堀江譯）. Anna Rochester; „Rulers of America"（『アメリカの支配者』三一書房，上井譯）. James S. Allen; „Atomic Imperialism"（ジエームス・エス・アレン『原爆帝国主義』，大月書店，世界經濟研譯）.

などが、それである。

これに反して、これら一系列の諸労作のうち、歴史的諸著作は、まだわが国ではあまり紹介されておらず、まして邦訳出版はされていない。そこで、わたくしは、これらの歴史的諸著作のなかから、二、三のものをえらんで紹介しよう。

三

さて、これらの進歩的な著者たちがあらわしたアメリカ資本主義の歴史的諸著作のなかには、

Philip S. Foner; „History of the Labor Movement in the United States", Anna Rochester; „The Populist Movement in the United States". Herbert Aptheker; „Essays in the History of the American Negro".

などのように、特殊問題をとりあげた著述も多くふくまれているが、ここでは、アメリカ革命を中心としてアメリカ資本主義の発生期の諸問題を分析したつぎの三つの諸文献をとりあげよう。

A）Herbert M. Morais; „The Struggle for American Freedom" New York, International Publisher,

1944.

B) Anna Rochester; „American Capitalism 1607—1800" New York, International Publisher, 1949.

C) Jack Hardy; „The First American Revolution" NewYork, International Publisher, 1937.

H・モーレーの労作は、一六〇七年から一八〇一年までのあいだのアメリカ資本主義の歴史をとりあつかっており、A・ロッチェスターの労作は、その表題にしめされているように、一六〇七年から一八〇〇年までの期間をとりあつかっている。したがって、この二つの労作はほとんどおなじ期間におけるアメリカ資本主義の歴史をとりあつかっているといってよい。一六〇七年というのは、ヴァージニア会社がヴァージニアにはじめてイギリスの移住民一二〇人を送った翌年であり、この年にイギリス最初の永続的な植民地の基礎となったジェームス・タウンが建設されたのである。つまり一六〇七年はアメリカにおけるイギリス植民地が実質的に誕生した年である。

他方、一八〇〇年というのは、トーマス・ジェファーソン(Thomas Jefferson)が、西部および南部の小農民と東海岸諸都市の手工業者、労働者、小商人たちとの圧倒的な支持のもとに、北部の大資本家、金融業者および投機業者によって支持された反動的なフェデラリスト(Federalists)との、大統領選挙戦において、勝利をしめた年である。つまりこの年は、貴族的、専制主義的な小数者の利益を代表するフェデラリスト党の手から、民主主義的要求をスローガンにかかげた大多数者の利益を代表する民主共和党(Democratic-Republican Party)の手に、アメリカ合衆国の政権が移行し、いわゆるジェファーソニアン・デモクラシーが勝利をおさめた年である。ジェファーソニアン・デモクラシーの勝利について、H・モーレーはつぎのように評価している。

「ジェファーソンの大統領選出は、現存する所有関係の変更あるいわ支配階級の政権の顚覆という意味における革命を構成するものではないが、それにもかかわらず、それは、ひとつの時代をしるしずけたのである。……事実、ジェファーソンの選出は、共和国アメリカの進歩的勢力にとっての輝かしい勝利を構成した」(モーレー、前掲書、二八二〜三ページ)。

したがって、一六〇七年から一八〇〇年という期間は、アメリカ資本主義の萠芽がはじめて発芽した時期から、それの確立がようやくはじまろうとする時期にあたる。

ところで、H・モーレーは、アメリカ資本主義のこの時代を分析するにあたって、じぶんの著作の目的を三つあげて、つぎのようにのべている。

「ジェームス・タウンの建設からジェファーソンの大統領選出までの期間をふくむこの書物の、なによりもまず第一に目的とするところは、アメリカ歴史の顯著な政治的、社会的および文化的諸事実を、作用している物質的諸勢力とむすびつけることである。第二には、この書物は、この国における民主主義が

どのようにしてうちたてられたかということ、およびそのために斗われた、しばしば流血の斗争について、読者に理解をあたえることを目的としている。第三には、この書物は、アメリカにおける自由のための斗争が、どのようにヨーロッパにおける自由のための斗争とむすびついていたかをしめそうとこころみている」（モーレー、前掲書、七ページ）。

かように、モーレーは、政治上および文化上の諸々の出来事は、物質的、経済的諸関係に規定されているのだから、前者は後者との相互関連においてのみ理解されうるという見地、および封建的諸関係にたいする民主主義の勝利は、人民の流血の階級斗争をつうじてのみ達成されうるという見地をあきらかにしている。さらに、モーレーは、イギリス一三植民植の革命の国際的関連について、「アメリカ半球革命は、その当時、発展しつつあった大資本主義世界革命の一局面であった」（フォスター、前掲書、一二二ページ）という、W・フォスターの見地と軌を一にしている。このような見地は、いうまでもなく、史的唯物論に立脚するものであり、モーレーの労作をはじめから終りまで一貫しているものは、この史的唯物論的方法である。

A・ロッチェスターはじぶんの労作にかんして、その方法論や目的についてはなにものべていない。しかし、同氏は、さきにかかげたアメリカ金融資本の体系的分析〝Rulers of America〟や、ニュー・ディール時代のアメリカ資本主義農業の分析〝Why Farmers are Poor〟などを公けにしたアメリカ第一級の進歩的な女流経済学者として、わが国にも以前から紹介されており、マルクス主義的方法は同氏のすべての労作に貫かれている。

さらに、最後にかかげたJ・ハーディーの労作についていえば、この労作の編集者である Richard Enmale は、編集者序文のなかで、この著書は「第一次アメリカ革命のマルクス主義的研究をもって、学生および労働者に役だたせることを目的としている」（ハーディー、前掲書、一四ページ）とのべている。

この科学的に正しい方法論のゆえに、これら三つの労作は、数かぎりなくあるアメリカ資本主義の歴史にかんする諸文献のなかでも少数のものにぞくするものである。というのは、従来の史家たちの多くは観念論的方法に立脚しており、せいぜいのところ、経済主義的方法をでなかったからである。

たとえば、さきにかかげたG・バンクロフトの労作は、アメリカ史のそのごの研究に非常に大きい影響をおよぼした文献であるが、かれは、アメリカ革命を観念論的および愛国主義的方法で分析しており、革命を政治的自由のための絶えざる斗争の一局面だと表現している。そしてこの革命の原因をジョージ三世の悪魔的性格にもとめ、一七七六年にアメリカの愛国者は、この悪魔にたいして、じぶんじしんの自由のためにばかりでなく、イギリス人の自由をも維持するために、神の使命をあたえられたのだと、理解している。また Green や Trevelyan などのいわゆるウィッグ学派（Whig School）にぞくする人たち

も、だいたいこれと同様な立場にある。

これに反して、Van Tyne やバンクロフトの見解を反駁した Sydney G. Fisher などは、アメリカ革命の原因を、国王の専制的な活動や行政にもとめないで、政治的自由にかんする相違とか、人間正義にかんする考えの相違とか、人類の最高利益にかんする相違などというきわめて抽象的なモメントのなかにもとめている。たとえば、フィシャーは、その著 „Struggle for American Independence" 1908 のなかで、アメリカ革命は、「思想、経験、出来事の長い進化」の事業であるとのべている。

このような観念論的な潮流のなかにあって、アメリカ革命の原因を、物質的な経済的利害関係のなかにもとめて、それの正しい把握に一歩接したのは自由主義的ブルジョア学派のひとたちである。たとえばこの学派の代表者である Arthur M. Schlesinger は、その著 „Colonial Merchants and the American Revolution" 1917 および „New Viewpoints in American History" 1922 のなかで、アメリカ革命の原因を、一方では、イギリス支配者と植民地の商人およびプランターとの、他方では、植民地内部における小数者と小農民および都市手工業者との、経済的利害関係の衝突のなかにもとめた。A・M・シュールジンガーのこの見解は、さらにそのど James F. Jameson によって、その労作 „The American Revolution Considered as a Social Movement" 1926 のなかで発展させられた。自由主義的ブルジョア学派のひとたちは、このようにアメリカ革命の研究において大きい貢献をのこしたのであるが、しかしかれらは、この革命を社会発展の法則性にもとずいて把握することができず、したがってその歴史的不可避性を論証することができなかった。たとえば、シュールジンガーは、もしもピットの勧告にしたがっていたならば、植民地と本国との衝突はさけえられたであろうと、考えた。（ハーディー、前掲書、編集者序文をみよ。）

このように、従来の多くの文献は、観念論的方法にもとずくものであり、せいぜいのところ経済主義的方法の域をでなかったのである。ところが右にあげた三つの労作は、これらのブルジョア歴史家たちの狭い階級的視野を克服し、科学的に正しい史的唯物論的方法にもとずいて、アメリカ革命とそれに関連する諸問題の解明に努力している。そしてこのような労作があらわれたことは、アメリカのブルジョアジーがますます反動化する対極において、このブルジョアジーが生みだしたプロレタリアートが、ますますじぶんたちの力を結束強化し、じぶんたちの解放のための理論的武器をねりあげたことの結果である。そしてわれわれは、かれらのこうした努力の広汎な体系的な成果を、William Z. Foster; „Outline Political History of the Americans" 1951 にみいだすのである。

四

では、右の著述家たちは、ブルジョア歴史家たちの見解に反

して、アメリカ革命をどのように把握しているだろうか。H・モーレーはつぎのようにのべている。

「第一次アメリカ革命はつぎの二つの一般的運動の産物であった。すなわち、自主的政府および民族独立のための斗争と、より民主主義的な秩序のためのアメリカ人じしんのあいだの斗争との、産物であった。したがって、革命は、対外的側面すなわちブリテンにたいする植民地解放戦争と、対内的側面すなわち反民主主義的要素にたいする大衆の反抗とをもっていた。それは革命的斗争の近代的時代に先鞭をうつものであり、かつヨーロッパにおける全一系列のブルジョア・デモクラシーの動乱と全世界をつうじての植民地反乱との手本となった」（モーレー、前掲書、一九一ページ）。

これらの著述家たちは、さらに植民地内部における反民主主義的要素にたいする大衆の反抗の経済的基礎をつぎのモメントにもとめている。奴隷所有者による奴隷の搾取、植民地領有者による年期奉公人の搾取、大土地所有者による小作小農民の搾取、大商人による小生産者の收奪、土地投機業者によるフロンティアー小農民の圧迫、債権者（商人）による債務者（小農民、手工業者）の抑圧、特権的大商人による小商人の圧迫、等々である（ロッチェスター、前掲書、四〇―六三ページ）。こうした有産者による無産者の搾取、收奪、抑圧とこの基礎上に発生した各階級間あるいわ各階層間の斗争は、植民地経済の発展とともに激化したのであるが、しかし、植民地における民主主義的斗争の一般的な経済的基礎をなしたものは、土地問題である。そして植民地領有者、大土地所有者および土地投機業者にたいして、公平な土地の分配を要求する年期奉公人、小作農民、フロンティアー独立農民の広汎な民主主義的斗争こそが、植民地における民主主義運動の中心点を形成したのである。

イギリスからの民族解放斗争の経済的基礎をなすものは、イギリスの資本家による植民地工業の資本主義的発展の抑圧、植民地資本の民族市場の開拓にたいするイギリス資本の抑圧、植民地人（プランター、地主、小農民）の西部進出にたいするイギリス支配階級による禁止、課税その他の方法によるイギリス本国の植民地人の收奪、等々である（ロッチェスター、前掲書、六七―七八ページ）。もちろん、これらの二つの側面は別々のものではなく、対内的側面と対外的側面とはひとつの運動に統一されてはいたのである。

ところで、これらの諸問題を叙述するにあたって、H・モーレーもA・ロッチェスターもその著作をともに、第一部と第二部とにわけている。第一部は一六〇七年から一七六三年までの期間をふくみ、第二部は一七六三年から一八〇〇年（一八〇一年）までの期間をふくむ。一七六三年とは、七年戦争にともなう北アメリカにおける英佛戦争（いわゆるフランス・インディアン戦争）の終結の年であり、イギリスはこの戦争の勝利によってアレガニー高地以西ミシシッピー川にいたるフランス領を領有すると同時に、北アメリカ植民地の弾圧の強化にのりだし

た年である。そしてこの年以降革命の勃発までにいたる間は、革命戦争を必然ならしめたイギリス支配階級と植民地人とのあいだの矛盾、敵対がますます激化してゆく期間であり、同時にこの反英斗争のなかでアメリカの植民地人が、植民地における経済的資本主義的発展、国内市場の萌芽的創出の基礎上に、ひとつの民族として形成されてゆく過程でもある。H・モーレーは、第一部を『アメリカ人の起源』(Origins of American People) と題し、第二部を『アメリカ民族の創生』(Creating the American Nation) と題している。

このように、これらの労作は、同じ対象を、同じ研究方法にもとずいて、しかもだいたい同じ叙述の順序でのべているのではあるが、それらは、それぞれことなった特徴とニュアンスをもっている。

A・ロッチェスターの労作『アメリカ資本主義』は、主として植民地の形成から資本の本源的蓄積期までにおけるアメリカ資本主義の経済的基礎の発展および諸階級間ないしは諸階層間の矛盾、敵対の発生と激化についてのべている。そしてこの著作は、大衆的な読者にも親しまれやすいような平易な叙述の形式をとっている。しかし、分析の重点が主として経済的基礎におかれているために、この経済的土台に規定されて発生する政治的および法律的諸関係にかんする叙述は比較的簡単にすまされている。

しかしこの時代のアメリカ資本主義を全機構的に把握しようとおもえば、つぎのような文化的、宗教的および政治的諸関係と、それが経済的諸関係におよぼした作用を研究しなければならない。すなわち、植民地における宗教的諸関係、植民地におけるイギリスの政治的支配機構と植民地における自主的政治機構およびそれらの間の対立、ロイアリストとパトリアットとの対立、大陸会議、大陸会議のパトリアット陣営内における右翼＝ブルジョア的翼と左翼＝ブルジョア・デモクラシー的翼との関係、革命権力の構造、アーティクル・オブ・コンフェデレイションをめぐる斗争、アメリカ革命がおよぼした経済的ばかりではなく、政治的、宗教的諸結果、アメリカ憲法の制定とそれをめぐる政治的系争、フェデラリスト党とデモクラチック・パブリカン党との政治的斗争などの諸問題が、これである。またイギリスにおける革命および政変と植民地との関係や、革命中における植民地の革命政府とフランス、スペインとの政治的関係、革命後におけるアメリカ合衆国とフランス革命との関係などのような国際的諸関係をも研究しなければならない。

H・モーレーの労作『アメリカ自由のための斗争』は、これらの諸問題を、経済的諸関係との関連においてのべている。したがって、H・モーレーのこの労作は、この時代におけるアメリカ資本主義の社会機構の全般についての分析をあたえたものといえる。もっともこの書物は三二〇ページ程度の書物であるために、これらの諸問題のあるものをとくに専門的に研究しているのではない。しかしこれらの諸問題をその相互の関連にお

いて正しく、しかもきわめて透徹したかたちで分析していることは、この労作のもっともすぐれた特徴である。

これら二つの労作にくらべて、J・ハーディーの労作『第一次アメリカ革命』は、政治的諸関係の分析が多く、前半では、イギリスの支配階級による植民地弾圧のための諸政策をイギリスの当時の経済的諸関係との関連において分析し、植民地におけるそれにたいする反抗をのべている。後半では、革命中における二重権力の問題、革命政府の構造、サンス・オブ・リバティー、保安委員会、通信委員会などの革命的諸機関ないし諸団体の機能と活動、サム・アダムス、トム・ジェファーソン、F・フランクリン、P・ヘンリーなどの革命の指導者たちの活動をのべ、革命の経過と成果についての総括をあたえている。

このようにこれらの書物は、いずれもそれぞれの特徴とすぐれた点をもっている。筆者は、この小さい『紹介』で、これらの労作をその細部にわたって余すところなくのべることはできない。そこで右にのべたそれぞれの特徴をより具体的にしめす意味において、これらの労作の章別をつぎにしめし、そのおのおのについて、簡単な註釈をくわえよう。

A　アンナ・ロッチェスター著『アメリカ資本主義、一六〇七年―一八〇〇年』インターナショナル・パブリッシャー、一九四九年

第一部　一六〇七年から一七六三年まで

1　一七世紀におけるイングランド

イギリスにおける資本主義の發生、国教會の成立、ピューリタン革命、源蓄と『浮浪者』の發生、これらの『浮浪者』の植民地への輸送がのべられている。

2　商業資本の拡張

イギリスおよびヨーロッパにおける商業資本の発生と重商主義の成立、および商業資本の植民地への進出がのべられている。

3　移住地のプロモート

ヴァージニアのロンドン會社の成立にはじまる各植民地――プリマス、マサチュセッツ、ペンシルバニア、メリーランド、ニュージャーシー、デラヴェアおよびニューヨークの各植民地――のプロモーター――T・スミス、J・ウインスロップ、W・ペン、バルチモーア、バークレー、カートレット、ヨーク公――による植民についてのべられている。

4　インディアンの驅逐

大陸にきたヨーロッパ人とインディアンとの關係、インディアンからの原始農業の傳授、毛皮取引、インディアンの奥地への驅逐とインディアンの反抗についてのべられている。

5　土地の狀態

北部および南部植民地における自然的諸條件がのべられ

ている。

6　**土地の分配**

初期の植民地における土地所有の發生、ヴァージニアおよびジョージャにおけるヘッドライト制度、年期奉公人の移入、南部、中部植民地における封建的大土地所有の發生についてのべられている。

7　**植民地の農業**

南部植民地におけるタバコ、米、藍などの栽培の發生、海岸における富裕なプランテーションと奥地における小農民經營の發生、社會的分業の發生、ニュー・イングランド植民地における穀物栽培と家畜の飼育の發達についてのべられている。

8　**毛皮、漁業、森林**

ニュー・イングランド植民地の対外貿易の基礎であり、富の源泉である毛皮、漁業、森林について、およびインディアンとの悪らつな不等價交換についてのべられている。

9　**工業の発展**

ニュー・イングランドを中心とする造船業、船舶品工業、鐵工業、皮革工業、羊毛工業などの發展とそれに必要な資本の調達についてのべられている。

10　**生産物交換と交換**

主として植民地における通貨問題――スペイン銀貨の輸入、そのための三角貿易の發生、種々の商品が一般的等價物の機能を果したこと、植民地における紙幣の發行、土地銀行券の發行とそれの減價のために生じた債務者と債權者との利害關係の突衝についてのべられている。

11　**植民地産業にたいする帝国的制限**

イギリス重商主義政策が、羊毛條令、帽子條令、鐵條令および通貨條令によって植民地工業の資本主義的發展を抑壓し、フランス領西インドとの植民地商業にたいして、外国砂糖への課税、糖蜜條令によって干渉がくわえられたことがのべられている。「しかし、帝国的諸制限を強行するためのこうした試みは、かれらの重商主義体制におけるひとつの鋭い内的矛盾をふくんでいた。なぜならば対フランス領西インド貿易を成功的に干渉することは、イギリス品の輸入のための〔植民地の〕資金の主要な源泉を枯渇させたであろうからである。いわゆる糖蜜條令の厳格な施行は、植民地における商人資本を植民地工業の初期の發展にむかわせるに十分であった」（三七ページ）。

12　**不況の植民地にたいする打撃**

何回もの対インディアン戰爭が植民地の經濟にあたえた破壊的結果、オランダとの戰爭、スペイン王位繼承戰爭など、一六五二年から一七六三年までの約三分の一の期間をその渦中にまきこんだイギリスの対外戰爭が植民地

経済にあたえた影響、一六四〇年のニュー・イングランドの最初の不況、一六七五年の南部のタバコ不況、一六八五年のマサチュセッツの不況、一六九九年の凶作、および十八世紀の不況についてのべ、不況のたびごとに、南部プランターがイギリス商人からの債務者に轉化したことについてのべられている。「しかし高度に発達した資本制的経済の循環的恐慌はまだ遠い將來のことであった」（三七ページ）。

12　**階級的衝突の増大**

植民地における階級間の係争點は「勞働者（主として、自由な賃労働者の代りである奴隷および年期奉公人）の搾取、價格問題、市場問題および貨幣價値の問題、生産費の相違、種々の形態の獨占にたいする反抗をふくんでいた」（四〇ページ）。しかしこの節では、一七世紀中ごろまでの植民地初期の植民地とイギリス本国との、および植民地の内部の、政治的衝突――マサチュセッツ植民地とイギリス本国との衝突（一六三四）、同植民地内部の衝突とロードアイランドおよびニュー・ポート植民地の分離（一六三六）、およびヴァージニアの自主的政府についての本国とヴァージニア植民地の衝突――がのべられており、同時に植民地初期におけるメリーランドの免役地代反対斗争、奴隷の反亂がのべられている。しかしこの節は、これにつづく諸節にたいする序文的意義をもつものであり、これらの後續諸節では、植民地における各階級間の斗争が、つぎの順序でのべられている。

14　**ヴァージニアにおける反乱**

15　**植民地領有者にたいする斗争**

16　**虚政にたいする反抗**

17　**地主にたいする小作農民**

18　**『乏しいが、向うみずの人々』**

ペン一族の封建的土地所有に反対して立ちあがった農民をペンはこうよんだのである。

19　**南部植民地における衝突**

14から19までは、いずれも、免役地代、封建的土地所有、封建的諸特権にたいする農民の斗争である。

16　**戰争と拡張**

植民地における三回のフランスとイギリスとの戰争、この戰争における兩国によるインディアンの利用、これらの戰争が植民地經濟にあたえた影響についてのべられている。

17　**階級的対立の尖鋭化**

「一七六三年にフランス・インディアン戰争が終るとともに植民地は新しい問題に直面した。この問題は戰後から植民地時代が終るまでつづき、アメリカ革命の前奏曲となった」（五九ページ）。

戰争後貧富の差はますます大きくなった。他方、各植民

地人の統一の萌芽は成長し、「アメリカの人びとは、一七六三年ののちにいたってはじめて、イギリス帝国にたいするかれらの政治的無關心から目ざめ、かれら自身の共通の利益と民族的獨立の可能性を考えはじめるようになった」。しかし「富めるものも、貧しいものも、すべてのものが公的な出來事について発言権をもつ眞のデモクラシーは、どの植民地にもなかった。白人のあいだでさえも。しかし移住者がかれら自身に不満のあった時には、自由な市民は、知事や植民地領有省の支配にたいして抵抗を組織するのに躊躇しなかった。少くとも七つの植民地においては、一七六三年以前に、かかる抵抗は大衆行動にまで昂った。そしてこの大衆行動は、決議および抗議から、植民地政府に対抗して賃さいに武器をとりあげるまでになった。ネグロ奴隷は、奴隷狀態とその動物的取扱に反抗して立ちあがり、南北戰争でかれらが自由になるまで約二五〇回の反亂をひきおこした。……かくて、擴大しつつある植民地は……しだいに反抗的に成長しつつあった」（六二―三ページ）と、著者は、第一部をしめくくっている。

第二部　一七六三年から一八〇〇年まで

18　イギリスの諸政策にたいする反抗

『宣言線』と植民地地主および投機業者との対立、印紙條令およびイギリス軍の駐留にたいする植民地の不買同盟、通貨條令にたいする植民地の反抗など、本国と植民地とのあいだの斗争が漸次的に昂揚してきたことについてのべられている。

19　産業の利益の増大

戰後における植民地經濟の資本主義発展、本国の圧迫の強化、この発展の基礎上における植民地の民族的自覚の成長についてのべられている。「植民地および植民地の産業が、政治的にも經濟的にも、政策の決定になんらの発言権をもっていなかったことは、アメリカの基本的不満であった。」「窮局において、衝突を集中させ、決定的分裂にみちびいたものは、製造工業にたいする制限ではなく、民族的自覚とイギリスの課税と支配とにたいする憤激であった」（七〇―七一ページ）。

20　革命戰争への動き

革命的團体サンス・オブ・リバティー、ボストン虐殺、茶條令と不買盟、ボストン茶會、イギリスの報復手段、第一次大陸會議の招集など、革命前夜における騒然たる植民地の狀勢がのべられている。

21　戰時企業からの暴利

ウイリング・アンド・モリス、J・ローウェルその他による戰時利潤の獲得、獨立宣言署名者の階級的構成　革命中における經濟の発展がのべられている。

22　利益と損失

戰後の通貨および金融の諸問題、北アメリカ銀行の設立が主として分析されている。

23 **戰後の衝突の発展**

アメリカ革命は、資本主義的自由、搾取の自由を保證する革命であった。したがって、革命後は資本主義に固有な階級斗争が発展した。しかしこの節はつぎの諸節のまえがきであり、誇張された『アメリカ歴史の危機の時代』および一八一九年の恐慌の分析がおこなわれている。

24 **ニュー・イングランドにおける債務者の反乱**

マサチュセッツにおけるシャイスの反亂およびニュー・ハンプシャーおよびヴァーモントにおける同様の反亂がのべられている。

25 **富裕なものにたいするえこひいき**

憲法をめぐる斗争、A・ハミルトンの登場、アメリカの源蓄の一要因であるハミルトンの国債にかんする提案についてのべられている。

26 **課税に反対する農民**

ハミルトンの政策にたいする革命後の民主主義的斗争がのべられている。そのひとつは、酒消費税、家屋税に反対するウイスキー反亂、J・フライスの反亂であり、もうひとつは、フェデラリストの反民主主義立法 Alien and Sedition Act に反対するデモクラチック・リパブリカンの闘争である。

27 **貿易の回復と拡大**

一八世紀末におけるアメリカ工業の発展と外国貿易の発展がのべられている。

28 **權力をにぎった商業資本主義**

北部の商業資本の制覇と産業資本の漸次的な成長にのべられているが、分析は簡單すぎる。

29 **ハミルトンの製造工業にかんする報告**

この有名な一七九一年のハミルトンの報告について著者はつぎのようにのべでいる。「ハミルトンの報告は、一九世紀に発展すべき資本主義の青写眞であった。それは小數者のための巨額な利潤および増大する富をもたらすであろう資本主義制度の諸原則を表現したものであった。それは同時に搾取の増大と大多數の勤労人民の窮乏を意味するものであった。これらの諸原則は、この世紀のこれにつづく二〇年間に繊維、鐵その他の製造業によって熱心に採用された。しれしこれらの諸原則は、その代りに、労働組合の組織と一九世紀初期の労働者の闘争にみちびいた」(九七ページ)。

30 **工場制度がその出発をはじめる**

イギリスの産業革命の成果のアメリカへの移入、スレイター、M・ブラウンによるアメリカ最初の近代的大工業の成立、そのどの繊維諸工場の発生、児童および婦人労働の搾取についてのべられている。この搾取によってつ

くられた富は比較的小さかったが、「しかし、この初期の財産は、アメリカ資本主義のつぎの二〇〇年間に増大し、蓄積した富の苗木となった」（一〇〇ページ）。

31 **株式会社の発展**

金融業、保険業、運河・道路事業、のちには製造工業における株式會社の発展、ハミルトンの提案による第一合衆国銀行の設立、イギリス資本のアメリカへの流入についてのべる。「ジェファーソンの就任までに、アメリカにおける株式會社は、その基礎上にかれらの子孫が築きあげることのできた資本主義の確固とした地盤をつくっていた」（一〇三ページ）。

32 **西部における土地投機**

コンフェデレイションの西部の國有地にたいする土地政策、オハイオ會社その他による国有地の收奪、投機業者の手中における土地の巨大な集積がのべられている。

33 **二〇〇年ののち**

一八世紀末の移民の増大、西部農民と東部製造業者との対立、鐵工業の発展、ハミルトンの敗北とジェファーソンの勝利についてのべ、奴隷制度の存續と奴隷の反亂、労働者の成長と労働者の初期の狀態、労働者階級の最初の組織化についてのべられており、著者はさいごに第二次大戦後のアメリカ帝国主義の諸問題に言及し、社會主義制度への展望についてのべている。

B ハーバート・M・モーレー著『アメリカ自由のための闘争』——最初の二〇〇年——、インターナショナル・パブリッシャー、一九四四年

第一部　アメリカ人の起源、一六〇七—一七六三年

第一章　イギリスとアメリカの背景

1 **經済革命、一三五〇—一六〇〇年**

2 **チューダー専制政治と商人資本の成長**

3 **おーい、西ゆきだ！**

4 **アメリカの位置**

イギリスのエンクロージュア、イギリスのマニュの発生、イギリス商業資本の対外的発展、エリザベス治下の源蓄と労働立法、イギリスとスペインとの世界市場における經済的・政治的対立、初期植民地の成立、インディアンとの關係と白人によるそれの驅逐がのべられている。

第二章　初期植民地の形成、一六〇七—一六六〇年

1 **南部のタバコ植民地**

2 **ニュー・イングランド植民地**

1では、主としてヴァージニアおよびメリーランドの成立、年期奉公人の移入、ネグロ奴隷の採用、ヘッドライト制度、タバコ栽培等の經済的諸關係、および植民地の

自主的政府の要求とジェームス一世との対立、ヴァージニアの初期の反亂、イギリス革命と植民地へおよぼしたそれの影響、メリーランドにおける民主主義的要求とメリーランドの反亂についてのべられている。

2では、ニュー・イングランド植民地の沿革、イギリスと植民地の対立、植民地内部におけるピューリタンの宗教的專制主義にたいする人民の闘争などの政治宗教的諸問題、および植民地における土地制度、農業、漁業、貿易の発展、等々にかんする經濟的諸問題がとりあげられている。

第三章　帝国と植民地との関係、一六六〇―一六八九年

1　イギリス重商主義体制

2　イギリス重商主義体制と南部植民地

3　商人たちのあいだの闘爭、オールド・イングランド対ニュー・イングランド

4　アメリカと一六八八―八九年の名譽革命

1では、スチュアート朝の復活とイギリス重商主義政策、イギリスとオランダとの三つの戰争、航海條令、海上貿易におけるイギリスの制覇についてのべられている。

2では、南部植民地におけるタバコ生産の不振とプランターの經濟的困難、小農の窮乏、一六七六―七七年のヴァージニアの反亂、タバコ反亂、メリーランドの反亂、反免役地代闘争がのべられている。

3では、イギリス商人とニュー・イングランド商人との対立、一六八四年のチャーターの取消とこれに対する反対闘争、ニュー・イングランド・ドミニオンの成立、ドミニオン政府の土地政策、課税方法、集會禁止などによるイギリスのニュー・イングランドへの壓迫がのべられている。

4では、名譽革命後、各植民地で発生した民主主義的自由のための闘争、すなわちボストンの蜂起、ドミニオンの顚覆、ニュー・ヨークにおける闘争、ペンシルバニアにおけるペンの政治権力への人民の攻撃、メリーランドのJ・コードの反亂についてのべられている。これらの一連の闘争の成果について、著者はつぎのようにのべている。「全体として、アメリカにおける一六八九年のもろもろの革命的運動は、植民地デモクラシーの道を前進させた。ニュー・イングランド、ニュー・ヨークおよびニュー・ジャーシーでは代議制政府が復活し、マサチューセッツでは、市民権は宗教から分離され、自由となった。さらにビル・オブ・ライトが、イングランドにおけると同様にアメリカにおいてもイギリス人の費用のかからぬ世襲財産としてみとめられた。

一六八九年の名譽革命は植民地における民主主義運動を促進したとはいえ、それから生じた解決は、帝国と植民地という關係をいっそう强化する傾向をもった。アメリカにたいするイギリスの支配は、私領植民地および會社植民地が王領にかわったことによって擴大された、そし

てその動きは、イギリスの支配階級の重商主義的利益によってあきらかにしめされた。すべての王領植民地では、二重の権力が存在した。すなわち、外部の権威を代表する知事と内部を代表する植民地代議院がこれである。王領時代(一六八九―一七六三年)をつうじて、覇権をめぐってたがいに斗いあう二つの勢力が存在した、問題となった基本的係争点は、たれがアメリカを支配すべきか、ということであった」(八七ページ)。

第四章　王領時代、一六八九―一七六三年

1　移民

2　経済的拡張

3　アメリカにおける支配のための闘争

4　ニュー・フランスの征服

5　アメリカ文化への方向

王領時代を特徴ずけるものは、植民地における農業、工業、商業の発展であり、この発展はこの時代における移民の増加(人口は一六九〇年の二〇萬人から一五〇萬人に増加)である。**1**および**2**では、これらの発展とそれにたいするイギリスの圧迫がのべられている。しかし、イギリス政府の密貿易の圧迫は「アメリカ革命の勃発をはやめ」(一〇〇ページ)、南部プランターの負債の増加は「現存するイギリス帝国の枠内では実現の不可能な手段」(一〇三ページ)すなわちヨーロッパとの直接の貿易をプランターに痛感させた。

3の前半では、イギリス議會・植民地知事と植民地の代議院との対立をのべ、後半では、植民地内部における階級的衝突の激化についてのべている。この衝突の主たるものは、土地問題をめぐっての大土地所有者と小農民との衝突、通貨問題をめぐっての商人と農民との対立、公平な代議制の問題をめぐって大プランターと小農民の対立である。

4では、アメリカ植民地におけるイギリスとフランスとの戦争と、イギリスの終局的勝利についてのべられている。

第二部　アメリカ民族の創生、一七六三―一八〇一年

第五章　独立への道、一七六三―一七七六年

1　ブリテンと植民地

2　革命的高潮

3　分離のための運動

この章は革命前夜における植民地における経済的、政治的情勢が分析されている。**1**および**2**では、植民地にたいするグレンヴィルの弾圧および収奪政策(印紙條令、茶條令など)と植民地人民のこれにたいする反抗をのべており、**3**ではボストン茶會とイギリスの報復手段に対抗する植民地の革命勢力の結集と革命の準備がのべられている。すなわち第一回大陸會議、會議内における保守

派と過激派の二翼、武装反亂の準備、革命的非合法團体と合法的植民地政府との権力をめぐる闘争、第二回大陸會議、パトリアットとその階級的構成、ロイアリストとその階級的構成、獨立宣言の草案をめぐるアダムスとデイキッンソンの対立などがのべられている。

第六章　戰争と革命、一七七六―一七八三年

1　民族解放の戰争

2　アメリカにおける革命

1では、反英解放戰争についてのべられており、戰争中における植民地軍隊の創設と訓練、農民、手工業者、ネグロの兵士、戰時財政、イギリス軍とアメリカ軍の戰略、戰争の經過、植民地の各階級がじた役割、フランス、スペインにたいする戰時外交、それらの参戰とその国際的意義、戰争の勝利についてのべられている。

2では、国内における民主主義革命の遂行狀態、ロイアリストの追求、革命陣營内におけるブルジョア的翼（地主および大商人）とブルジョア・デモクラシー的翼（農民、手工業者、労働者、小商人）との対立、後者の代表的中心人物（ジェファーソン、アダムス、フランクリン）とかれらの政治的見解と政治的綱領、アーティクル・オブ・コンフェデレイションの批准をのべ、さらに革命の勝利がアメリカの民主主義化におよぼした偉大な成果についてのべられている。そしてその「基本的なものは、舊植民地の土地制度の改革であった」（二二四ページ）と著者はのべている。

第七章　アメリカ共和国、一七八三―一八〇一年

1　コンフェデレイション

2　憲法制定

3　国民政府

4　共和国の文化

この章は革命後における大ブルジョアジーの反動的政権樹立への傾向、これに反対する小農民、手工業者、労働者の闘争、フェデラリスト党とデモクラチック・リパブリカン党との対立、後者の勝利についてのべられえいる。

1では、平和經濟への移行、『アメリカ歴史の危機の時代』にたいする批判、一七八〇年代のアメリカ經濟の復興と発展、コンフェデレイションの土地政策、ダニエル・シャイスの反亂についてのべられている。

2では、この反亂に恐怖した北部ブルジョアたちの反動化とコンフェデレイションの修正へのかれらの動き、それの階級的裏面が分析されている。

3では、フィラデルフィヤ・コンベンション、この會議における人民の代表者の缺如、憲法制定をめぐる南北間の妥協、アメリカ憲法の性格についてのべられている。

4では、憲法にもとずいて樹立されたアメリカの政府とそのブルジョア的性格、ハミルトンの政策とアメリカの源蓄、一七九一年におけるハミルトンとジェファーソ

ン、フェデラリスとデモクラチック・リパブリカンとの二大政党の形成と対立の激化、廣汎な民主主義運動の昂揚と民主主義的諸團体の誕生、フランス革命の影響、Alien and Sedition Act とジェファーソンの反対、ジェファーソン・デモクラシーの經濟的基礎とそれの勝利がのべられている。

C　ジャック・ハーディー著『第一次アメリカ革命』
インターナショナル・パブリッシャー、一九三七年

（たんに章節別をしめすにとどめる）

第一章　イギリスの商業体制
1重商主義、2国家の役割、3イギリス重商主義政策の作用

第二章　植民地の発展と繁榮
1イギリスの法律の脱法、2戰争中におけるイギリス、3植民地の密貿易、4植民地における經濟的発展、5階級的発展

第三章　イギリスが強制的実施をこころみる
1平和におけるイギリス帝国、2帝国の費用、3グレンヴィルの政策、4重商主義政策の再度の制定、5印紙條令

第四章　アメリカ人の反抗のはじまり
1植民地經濟生活への影響、2革命の指導者たち、3植民地の反抗の諸方法、4その他の諸方法

第五章　戰争への道
1印紙條令の撤回、2反亂へ、3植民地の統一、4ボストン茶會、5五つの『耐えられない法律』、6第一回大陸會議と戰争の勃発、

第六章　革命で惱んで
1二重政府、2保安委員會、3獨立宣言、4諸党派の結晶、5ロイアリスト、6戰費の調達、7軍隊、8戰時利潤、

第七章　革命の成功
1海外の援助、2イギリスの妥協の提出、3戰争の終結

第八章　アメリカ革命のもたらした財産
1革命の諸結果、2革命のもたらした財産

五

アメリカの革命は、一六―一七世紀に全世界をそのなかにまきこんだ一連のブルジョア民主主義革命のなかでも、もっとも偉大な革命のひとつである。それの歴史的な解放的、民主主義的意義は、世界史のかがやかしい一ページをかざるものである。しかし、それにもかかわらず、この革命によって達成されたものは、人民のデモクラシーではなく、ブルジョアのデモクラシーであった。しかも、このブルジョア的な制限のなかにおいてさえも、アメリカ革命は、ひとつの大きい弱点をもってい

アメリカ初期資本主義にかんする最近の諸文献について

た。

それは、この革命が土地問題を部分的にしか解決できず、したがって革命後にもその基礎上に奴隷制度がのこったという点にある。「南部ウイッグの奴隷プランテーションも、同様に、ニューヨークの「パドソン」バレイのパトリアット地主の小作農民に保有されていた土地も、戦争中に、ブルジョア・デモクラシーによって手のつけられないままであった」（モーレー、前掲書、二三〇ページ）。そしてこの残存された大土地所有の基礎上に奴隷制度が維持され、拡大されたのである。「革命のもっとも大きい民主主義上の弱さは、この革命が奴隷を廃止することに失敗したという点にある」（フォスター、前掲書、一三三ページ）。そして「革命が奴隷と債務奴隷の問題をなにゆえに解決しえなかったかという主要な理由は、革命が大土地所有の解体という基本的問題を解決しえなかったからである」（フォスター、前掲書、一六九ページ）。

革命後アメリカの民主主義勢力は、フェデラリストに代表される北部の反動勢力の攻撃をうちやぶり、ジェファーソンを、つぎにはジャクソンを、じぶんたちの代表者として選出した。けれども、ジェファーソニアン・デモクラシーもジャクソニアン・デモクラシーも、けっして、アメリカ革命のこの民主主義上の弱さを克服することはできなかった。反対に、一九世紀前半において大土地所有と奴隷制度はますます発展した。したがって、アメリカの国民は、この革命の民主主義上の弱さを克服するためには、もうひとつの民主主義のための革命を、すなわち南北戦争を、必要としたわけである。アメリカ資本主義の歴史的研究において、独立戦争の研究のあとに、南北戦争の研究がつづかなければならないわけはここにある。

しかし、南北戦争もまた広汎なアメリカの国民に眞の民主主義をもたらすことはできなかった。今日あたらしい歴史的条件のもとで、この問題を解決すべき任務をになうものは、アメリカのプロレタリアートである。これの解明にこそ、アメリカ資本主義の研究の到達点がなければならない。